

TOPICS 今号のトピックス

- 公開セミナー 名作の舞台裏 土曜ドラマ「64」
- サテライト・ライブラリーの運用および大学での教育利活用
- 被爆・平和関連番組のNHK・民放合同上映会を広島と長崎で開催
- 企画展「オリンピックを学ぼう!展2016」&夏休み放送体験教室など開催
- 次期5年間(平成30～34年度)の事業方針の検討をスタートほか

■公開セミナー 名作の舞台裏 土曜ドラマ「64」

6月19日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催した。今回は、横山秀夫のベストセラーをドラマ化、原作の持つ緊迫感・重厚感を見事に映像化し話題となったNHK土曜ドラマ『64』を取り上げた。

[登壇者] ピエール瀧(出演) 大森寿美男(脚本)
屋敷陽太郎(制作) 井上 剛(演出)
[司会] 渡辺紘史(放送人の会)



見事な作品を作り上げた『64』の制作チーム。ピエール氏と大森氏は1967年生まれ、井上氏が68年、屋敷氏が70年生まれ。

同じような時代の空気に触れて歩んできた同世代。また、井上氏、屋敷氏、大森氏は2005年に同じ横山秀夫氏原作の『クライマーズ・ハイ』をドラマ化した際のスタッフでもある。

企画のきっかけについて、屋敷氏は「4年前の2012年秋、『クライマーズ・ハイ』以来の横山秀夫さんの小説と



いう事で楽しみに読み始めたら、夜、寝られなくなり朝まで一気に読んでしまった。是非ドラマにしたいと思い、井上に大森さんも誘って『クライマーズ・ハイ』のメンバーでまたやりたいと伝え、出版社に交渉した。テレビや映画など、もの凄い数のオファーがあった中で、NHKに最初にと行って頂いた。」と振り返った。『64』は映画化もされ、ちょうどセミナー開催時、公開中だった。鑑賞の有無を問われると、ピエール氏は「映画はまだ観ていない。三上は急にいい男になりましたね。」と会場を笑わせた。(映画ではテレビ版『クライマーズ・ハイ』にも主演した佐藤浩市氏が主演している。)

ピエール氏の起用について、屋敷氏は「井上がピエールさんしかないと言った。僕はピエールさんの事は『あまちゃん』の時の寡黙なイメージしかなかったが、ピエールさんが主演をされたコメディードラマを見た時に、間(ま)がいい方だと思った。記者会見で記者が『この鬼瓦が』と言うシーンがあるが、鬼瓦に見える人は誰かと考えた時に、井上がピエールさんだと言った。」と明かし、井上氏が「韓国の俳優ソン・ガンホのような顔の人がいいと言っていた。」と続けると、ピエール氏が「要するに地面から生えてきた系の人という事ですね。昭和の顔とも言われた。」と笑わせた。

屋敷氏が「僕は原作を夢中になって読み、この興奮をドラマにして視聴者にも味わってもらいたい一心だけだったが、井上がこのドラマは『難しいよ』と言った。最初は意味がよくわからなかったが、作っていくうちにわかってきた。」と振り返ると、井上氏が「原作を読んだ時、最初の半分位、僕はそんなに引き込まれなくて、最後までいき、最初の200頁は最後のために延々と書かれていたという事に気付いた。小説は一人一人が入り込んで読み、そこに辿り着けるが、映像でそのままやったら前半が凄く苦しくなる可能性がある。どうやったらそれを克服できるか、また書かれてないオフになっているサスペンス独特の部分を映像にするにはどうしたら良いのか、これは手をつけるのは難しそうだなと思った。」と続けた。

『64』は多重な人物関係、過去と現在が入り組む複雑な構造の小説。濃密な内容のため、長い時間が経過しているように思うが、実は7日間の話。この難しい原作を大森氏の脚本がドラマとして見事に構成した。大森氏は「原作にはもの凄い情報と様々なテーマやストーリーが組み込まれているが、それをどうドラマの中で簡潔に見せていくかと考えた時、三上に張りつこうと思った。三上の7日間をドキュメントするような形で追っていくこうと思い、三上の知らない所でこういう事が起きているという話を描くのを一切やめた。三上が知っていく範囲で見ている側も色々な情報を感じ、三上の悩みや変化を感受しながら、それを一緒に体験する。ロクヨンという事件



の過去のあり方と新しくロクヨンという事件が今現代に甦ってくるさまを三上を通して感じて貰うという構成にしたら苦勞なく書けた。」と語った。

ピエール氏の演技への期待について、ピエール氏は「NHKがピエール瀧を主演にして警察ものの、しかもハードな人間模様ドラマを撮りたいという時点でどうかしている。僕に最初に依頼がきた時に日本は終わったと思った。」と笑い「脚本を見たら僕のセリフの量がもの凄いの。これを出来るのかという所からスタートした。三上は何かに翻弄されて右往左往して必死にその場を切り抜けていく。三上と僕ピエール瀧が、大きな組織に巻き込まれ、その力技に翻弄されていくという所がリンクしていた。」と振り返った。

井上氏が「これまで培ってきたものを全て放り込め位の勢いでやった作品。」と言うと、屋敷氏やピエール氏から井上氏の演出方法について次々と話が飛び出した。屋敷氏は「井上は、非常にドキュメンタリー的に撮る。それぞれのシーンを各場面の随分前から随分あとまで撮る。俳優の方は毎回大変です。」と言うと、ピエール氏が「どうかしているんですよ。」と笑いながら続けた。「例えば、三上が廊下を歩いてきて広報室に入る場面。その200m位前、セットが無いような場所から三上がずっと歩いて来るところからやる。手前と後にのりしろが全部ついている物を井上さんは、まるまる5回5セットやる。20頁位あるセリフでも5セットやる。更に言う、その5セットでどこを狙っているのかわからない。要は、役者としては正面がない。カメラが、様々な所、思わぬ所にある。」と明かした。屋敷氏は「スポーツ中継みたいな感じ。カメラマン全員にインカムが付いていて、井上が『誰誰さんの表情がいいから撮って』『誰誰さんにもうちょっと寄って』など指令を出す。段田安則さんが橋の上からトランクを投げ、ピエールさんと村上さんが後ろのほうの車からずっと見ているシーンも車が着いてトランクを投げるといってお芝居を何回もする。」と言うと、ピエール氏が「あの橋の上は、到着してから段田さんがトランクを出して「翔子！」って叫びトランクを投げてスローになって終わっているが、あのおと「翔子!翔子どこだ!翔子一っ!」と言いながらの慟哭が5分ぐらい回る。しかも真夜中の極寒の中、5分を5セット。段田さん、最後は顔が真っ青になっていた。」と振り返った。井上氏はそのこだわりについて「ドキュメンタリーと言ったが、台本を読んだ時に凄く大事なセリフだと思っていた部分も、生身の人間が演じたり、現場の環境で、3行前とか3行先とか、ここが大事だったという事に気づく。現場で気付かされる事が多いという事を知ると、どれだけ現場を豊かに出来るかという事のほうが事前の準備より大事になってくる。僕は、ドライはやるが、カメラを通してのテス



な人間模様のドラマを撮りたいという時点でどうかしている。僕に最初に依頼がきた時に日本は終わったと思った。」と笑い「脚本を見たら僕のセリフの量がもの凄いの。これを出来るのかという所からスタートした。三上は何かに翻弄されて右往左往して必死にその場を切り抜けていく。三上と僕ピエール瀧が、大きな組織に巻き込まれ、その力技に翻弄されていくという所がリンクしていた。」と振り返った。

トはやらない。カメラマンたちは誰もテストをしてない。その新鮮な感じを常にキープするためにやっている。」と語ると、屋敷氏が「5セットといっても、井上の場合、同じカメラポジションからは絶対に撮らない。」と続けた。ピエール氏もカメラが毎回違う位置にあると明かし、「一番驚いたのは、顔を洗おうと思い、洗面所の水をジャーっと流したら排水口のところにカメラが1個あった。この絵、いつ使うのだろうと思った。」と言うと、井上氏が「でも、使いましたよね。」とにやりと返した。

このドラマの音の使い方に対して井上氏は「音楽の大友さんも『クライマーズ・ハイ』のスタッフ。『64』の世界観がわかっている。一回だけ群馬にお連れして、北関東の乾いた感じ、ウェットにならない音楽にしてくださいとお願いしたら、あの音楽が出来てきた。それを音響効果で特殊な付け方をした。」と語った。屋敷氏が「今の時代は音楽の録音は楽器ごとに録り、編集でミックスするのがほとんどだが、あえてアナログのスタジオでアナログの録り方をした。」と明かすと、井上氏が「NHKの最新鋭の録音機材で録ると凄く音は良いが、劇伴、つまりBGMになってしまうが、そういうスタジオで録るとちょっとざらざらした質感の音になり、一瞬、効果音や現場で鳴っている音かと感じるような音楽SE(効果音)になる。音楽が音質として主張しないような作りをアナログでやった。それはたぶん昭和という事に意識がいていたのだと思う、あまりつるつるした音色でないほうが良いと思った。」と続けた。



舞台となった群馬について、井上氏は「横山さんが書かれた作品世界は、どこの土地に行っても出来るかもしれないが、結果的に群馬県のあの雰囲気引き寄せられた。このドラマにおけるイメージネーションが湧く土地だと凄く思う。」と語った

三上の家の電話が鳴るラストシーンについて、ピエール氏が「最後に三上さんに褒美をあげないほうが良いと思っていた。褒美がないのにそこまでやるからこそ信頼できる警察官と僕は思っていた。でも、ドラマ上はそうしないと視聴者が気持ちの悪いまま終わるというのはわかった。」と話す、大森氏が「褒美という言葉を使うのなら、三上さんに褒美じゃなくて見てくれた人への褒美。明確にお嬢さんから電話があったとは言えないが、もしそう思ってもらえれば、このお母さんや一緒に見てくれた人も希望をもって終われるのではないかと思った。」と答えた。

息のあったチームでのこだわりをもった作品作りが素晴らしい作品を生んだ事が会場に伝わり、参加者からは「スタッフの方の努力と創意がドラマをいかに豊かにするのかわかった。」など多くの感想が寄せられた。

■サテライト・ライブラリーの運用および大学での教育利活用

今年の3月、放送番組センターは、NHK、日本民間放送連盟、全日本テレビ番組製作者連盟との間にそれぞれ結んでいる『放送ライブラリー業務に関する基本協定』を改定し、ネットを利用したストリーミング送信による番組利活用の全国展開事業を本格的に開始した。

基盤整備として現在、公共施設や大学などからの利用申し込みをより円滑に進められるよう、利用規約の制定や申し込み手順の整理などに着手しており、全国各所へ周知していく。

そうした中、今年度の大学での番組利活用は、4大学で実施しており、前期は、筑紫女学園大学では現代社会学部（荒巻達也教授）の「現代社会とメディア」（受講生73人）に5本、「メディア文化論」（受講生25人）に4本、駿河台大学ではメディア情報学部（今村庸一教授）の「映像メディア論」（受講生100人）の科目に2本、そして長崎県立大学では昨年度に続き、自習教室でも視



聴できるようにして国際情報学部（村上雅通教授）の「映像研究」（受講生43人）の科目に2本の番組を利用し、授業が行われた。

後期は、前期に続き駿河台大学メディア情報学部（塚本美恵子教授）の「メディアリテラシー」（受講生40人）から2番組の要望があったうち、1番組が利用されたのをはじめ、筑紫女学園大学現代社会学部（荒巻達也教授）の「テレビ論」（受講生50人）に6本、同じく「卒業ゼミナールⅡ」（受講生9人）に4本の利用が予定されている。また、上智大学新聞学科・柴野京子准教授の「デジタルアーカイブ論」（受講生20人）の実習授業として、1980年代に放送番組センターが制作して全国の民放テレビ局から放送された教養番組10本を教材にする計画をすすめている。

利用した番組は、事前に担当教授から要望のあった番組のうち、番組提供者や権利者から許諾が得られた番組をストリーミング形式で横浜から送信した。

また、各地の図書館など公共施設に端末を設置し番組視聴する、「サテライト・ライブラリー」は、昨年度に続き、広島平和記念資料館、諫早市立諫早図書館、市川市文学ミュージアムで今秋以降に運用が再開できるよう、準備を進めている。

■被爆・平和関連番組のNHK・民放合同上映会を広島と長崎で開催

8月5日（金）から14日（日）までの10日間、NHK広島放送局4階にあるハイビジョンシアター（80席）を会場に、『NHK・民放番組上映会2016 ～テレビが記録したヒロシマ～』を開催した。

昨年と同様に、広島の実地制作局がこれまで制作した被爆・平和関連番組24本を自選して上映した。番組は、放送ライブラリーの保存・公開番組の中から著作権、肖像権等の許諾を得て、横浜とネットを結びストリーミング送信で上映した。上映番組には、今年の6月、オバマ米大統領が広島を訪問した際に制作した番組など、タイムリーな番組も視聴してもらいたいとの各局からの要望もあり、急遽上映の準備を整えた作品もあった。10日間で来場者は619人を数え、来場者からはこれからもこの上映会を続けてほしいとの声もあがった。



また、今年も、長崎でも広島と同様の上映会を開催した。8月1日（月）から7日（日）までの7日間、長崎のNHKと民放テレビ4社が合同で、『NHK・民放4局番組上映会 ～テレビが伝えた被爆の記憶 from ナガサキ～』と題し、被爆・平和関連の番組上映会を開催した。

上映会場は、長崎原爆資料館のホール（345席）を使用した。上映作品は、放送ライブラリーの保存・公開番組を中心に各局3本ずつ、合計15本を選んだ。8月6日には、NHK広島放送局が制作したドラマを上映した。

上映会初日には各局のアナウンサー5人が同じステージに立ち、それぞれの上映番組を紹介するオープニングセレモニーが行われた。また、会場の出入口近くに幅と高さ



が180センチほどもある「寄せ書きパネル」を置き、訪れた人たちが平和への思いをパネルに書き込んだ。7日間の会期中、来場者は1,147人であった。

■企画展「オリンピックを学ぼう!展2016」

今夏のオリンピック放送を盛り上げるため、7月22日～9月11日、リオデジャネイロオリンピック開催記念「オリンピックを学ぼう!展」を開催した。



会場では、オリンピックの歴史や放送との関わりをパネル

や貴重な資料で振り返るほか、リオデジャネイロで行われた全28競技の紹介、日本代表選手団オフィシャルスポーツウェアなども展示した。夏休みの親子連れ、自由

研究の課題のため

という小・中学生を中心に様々な年代の方が来場し、「ポスター・聖火トーチ・ユニフォームの展示が良かった」「オリンピックで



実施される競技の事がよくわかった」「オリンピックを見るのがより楽しみになった」など多くの感想が寄せられた。期間中の来館者は1万人を超えた。

■夏休み放送体験教室・企画展など開催



◇夏休み放送体験教室

日テレ体験教室 (7/23)

講師：日本テレビ／子どもゆめ基金助成事業

小4～6年生とその保護者対象 参加者135人

アナウンサー体験教室 (7/27、8/9)

講師：フジテレビ・NHK／放送文化基金助成事業

小4～6年生対象 参加者58人

ラジオ・DJ体験教室 (8/2)

講師：FMヨコハマ／放送文化基金助成事業

小4～6年生、中学生対象 参加者30人

◇企画展・公開セミナー等

2016秋の人気番組展 10/15～11/27

放送ライブラリー

第14回 人気番組メモリー「ローカル路線バス乗り継ぎの旅」 10/8 情文ホール

第63回 カンヌライオンズ 国際クリエイティビティ・フェスティバル入賞作品上映会 11/5 浜離宮朝日ホール

■次期5年間（平成30～34年度）の事業方針の検討をスタートほか

■次期5年間の事業方針の検討を開始

放送番組センターは、平成24年度の公益財団法人への移行を機に、事業と財政のあり方について検討し、同年度11月開催の臨時理事会で「向こう5年間の事業方針」を決定した。

平成29年度が、同方針に基づいて、事業を実施する最終年度となるため、平成30年度からの次期5年間（平成30～34年度）の事業方針について検討を開始する必要がある、新たに3名の委員を加えて拡充した事業運営委員会で、次期事業方針の策定に向けた検討を開始した。

9月29日に開催された同委員会では、向こう5年間の事業方針の進捗状況の検証について、事務局から説明・報告した。その後、平成30年度からの次期5年間の収入見通し、関連する社会的ビッグイベント、主要な検討事項案などについて説明した。

主要な検討事項は、事業と財政のあり方、番組の二次利用が多様化している中で、公開番組の充実をどう進めるか、全国展開の推進、運用収益が落ち込んだ場合の対応などが予定されている。

今後の検討スケジュールは、11月から来年（平成29年）2月までに3回を予定している。

■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーでは、9月末現在、テレビ番組15,680本、ラジオ番組4,178本、テレビ・ラジオCMを10,469本、劇場用ニュース映画2,683項目を横浜の施設内で一般に無料公開している。

今夏NHK・民放局合同で実施した広島・長崎での被爆・平和関連番組上映会で使用した近年制作された以下の番組も、施設内で視聴できるようにした。

◇『未来へ 母子草の花 ～原爆小頭症患者 母と子の70年～』 中国放送・2015.7.26放送

◇『WATCH ～真相に迫る～ オバマからのメッセージ ～17分のヒロシマ演説～』 広島テレビ・2016.6.4放送

◇『母に抱かれて ～胎内被爆者の70年～』 テレビ新広島・2015.8.6放送

◇『TSS報道特別番組 ヒバクシャと被爆者 繰り返される悲劇』 テレビ新広島・2013.8.6放送

◇『静かな声』 長崎放送・2013.5.30放送

◇『11時1分の刻印 ～よみがえる 閃光に消えた町～』 テレビ長崎・2016.2.27放送

◇『私は原爆を伝えたかった』 長崎文化放送・2003.8.5放送

◇『爆心地から世界へ ～被爆70年・継承～』 長崎文化放送・2015.12.28放送